現代インド研究　第5号 223–250頁　2015年
Contemporary India, Vol. 5, 2015, pp. 223–250

通信：座談会

『現代インド地域研究』の総括と展望―第1期を終えるにあたって

平成21年度の準備期間を経て、平成22年度より本格的に始動した『現代インド地域研究』事業は、平成26年度で第1期6年間を終了する。幸いなことに、本事業は第2期への継続が決定している。第1期を終え、第2期を始めるにあたって、本事業のこれまでを総括し、第2期に向けての今後の課題と展望について意見交換を行った。

出席者（発言順）

・田辺　明生（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）
・長崎　暢子（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー、東京大学／龍谷大学名誉教授）
・堀本　武功（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任教授）
・三尾　稔（国立民族学博物館研究戦略センター准教授）
・粟屋　利江（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授）
・佐藤　隆広（神戸大学経済経営研究所教授）
・岡橋　秀典（広島大学大学院文学研究科教授）
・藤田　幸一（京都大学東南アジア研究所教授）
・嵩 満也（龍谷大学国際文化学部教授）

現代インド地域研究（INDAS）　座談会

田辺　座談会のトピックは大きく分けて二つあります。ひとつは現代インド地域研究（INDAS）の第１期の総括をしたいということです。これまでの活動でどういう成果があったのか、どういう課題が残ったのかです。もうひとつは、第２期に向けて私たちはどのような研究をなすべきなのかという展望についてです。この座談会ではこれらについて意見交換ができればと思います。

まず、私から最初に INDAS が、どういう成果を上げたのかについて振り返りたいと思います。私の考えでは、この INDAS には大きく三つの目的がありました。一つ目に学際的研究による現代インドの総合的理解、二つ目には研究の国際化、三つ目には次世代研究者育成です。ここではこのうち現代インドの総合的理解がどの程度進んだのかについて見てみたいと思います。

私たちは、自然生態、文化社会、政治経済の三つの視角を総合して、学際的・長期的視点から現代インドの変容を理解することを目指しました。自然生態については、まだこれからやっていくことは多くあると思いますが、ある程度、自然生態的な背景を視野に入れながら、長期的な歴史変動を見るためのきっかけは作れたのではないかと思います。また、文化社会と政治経済の相互連関的な変動について、ある程度、議論が進んだのではないかと思っています。

文化社会と政治経済の相互連関についての議論のピボットとなったのは、私の考えでは、多様な民衆の主体化と公共圏への参加の進展ということです。そしてこれに伴っていかなる変化が起こっているかが、文化社会と政治経済の双方の領域にまたがる問題として問われたということですね。諸民衆の主体化と公共参加によって、植民地的あるいはポストコロニアル的な、「エリート対サバルタン」あるいは「都市対農村」という二分法的構造が溶融して、多様な主体が従来の位置付けや場所を越えて、しかし、それぞれの固有性を維持しながらつながっていく。その新たなつながりは、矛盾や葛藤を含みながらも、それぞれが相互的な関係性や位置付けについて交渉と再編を行う場となっている。こうしたなかで、社会全体が新たなダイナミズムを持つに至っているのではないか。こういう視点が、ある程度、共有されたと思います。

もちろん、この現象についての解釈や評価はいろいろと議論があるところですが、ある程度、起こっている事実についての共通認識をシェアするなかで、各拠点が、それぞれの視点から、この新たな動態を明らかにするためのキーワードあるいは枠組を出していただいた。それによって総合的研究が、ある程度進んだのが研究上は一番大きな成果ではないかと思っています。

これから拠点の方に各拠点の成果をお話しいただくわけですが、私は京大拠点のなかで、研究グループ１と２のことだけ申し上げます。

研究グループ１「生存基盤持続型発展の可能性」では、開放性、多様性、階層性を持つ、南アジ

ア固有の多様性維持型の発展径路というものがあり、それが現代的な展開をしているのではないか、それによって現代インドのダイナミズムを捉えられるのではないか、という問題提起を行いました。

研究グループ2「多文化世界としてのインド社会」では、現代インドで、カースト、ジェンダー、宗教などの、ポストコロニアルな構造が流動化するなかで、従来の境界を越えた新たな交流と、文化的な創発が出てきた。そういうポジティブな可能性があると共に、これまでの構造を超えた動きがあることから、暴力を含むようなあつれきや対立も新たに生まれているのではないか。こうしたことについて、コンタクト・ゾーンという視角から論じました。

政治についての研究グループ3の成果については、後で堀本先生からお話ししてもらえればと思っております。

ではここで、今回の現代インド地域研究事業の前に、特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク―多元的共生社会の発展モデルを求めて」でリーダーをされ、この現代インド地域研究でも龍谷大学拠点の前代表をお務めになり、現代インド地域部会メンバーとしてもご活躍いただいた長崎先生から、前プロジェクトと、このINDASプロジェクトでは、研究課題や方法論にどのような違いがあったのか、また、歴史的な視点から見て、現代インドがどういう地点にあるのか、ということについてお話しいただければと思います。

長崎　前の「南アジア世界の構造変動とネットワーク」プロジェクトでは、『現代南アジア』全6巻を成果として出しました。『地域研究への招待』、『経済自由化のゆくえ』、『民主主義へのとりくみ』、『開発と環境』、『社会・文化・ジェンダー』、『世界システムとネットワーク』という構成です。南アジア研究においては、さまざまな専門分野の方々が一緒になって議論をするということはそのときがほぼ初めてでしたので、さまざまな苦労がありましたが、何とかこの全6巻をみんなでつくりました。

そのプロジェクトをやったのは、インドが経済自由化などの影響で1990年代ぐらいから大きく変わってくるときだったんですね。この変化を何とかとらえて、インドがいま全体としてどういう状態なのか、あるいは、インドがどういう方向に向かっているかを理解しなければならないというので、1990年代の変化を焦点にして研究しようということを何人かの皆さんに呼び掛けました。

例えば、独立後しばらくは国民会議派による一党優位体制があったのですが、当時それが崩壊して、初めてBJP（インド人民党）が出てきたときなんですね。政治的には、中央で政権が変わり、州の場合はかなりの多党化が起こっているという、そういう新たな変化が起きていました。社会主義をめざしているような国民会議派一党優位体制のときは、どちらかというと介入型政府だったものが、BJPのヴァージペーイー首相の下ではどちらかというと調整型政府に変わっている。

経済はどうかというと、ネルーの下で、社会主義経済の建設のために重工業をやらなければいけないとか、輸入代替工業だとか、そういうことを言っていたのが、1990年代を境に開放型の市場経

済のための貿易とか、資本の自由化とか、ある程度の規制緩和とか、そういうことが起こりつつある。

生活、文化の方では、独立以来、セキュラリズムを堅持し、ヒンドゥーもムスリムも両方包含しようという多民族的なナショナリズムがあったのが、だんだんヒンドゥー・ナショナリズムが台頭してきている。そのなかでアイデンティティ・ポリティクスがかなり大きく問題化してきており、アイデンティティのありかたが問われるようになっている。

またそれから環境問題がありました。環境問題は、1990年代以前だと、意識的な研究があまりなかったわけですけれども、このころから可視化されるようになって、環境と開発の矛盾などが問題になるようになりました。

ジェンダーについても、言い過ぎかもしれませんけど、ほとんど意識されていませんでした。やはりジェンダーを可視化して、男女共生社会とか、女性のマージナライゼーションをどうするのかとか、生産と再生産はどう結合するか、という問題を考えたいと思いました。

あとはインドを越えたものが二つありました。ひとつには環インド洋ネットワークを考えた方がいいのではないかというので、在外インド人（NRI）の問題を考えました。それからもうひとつは、冷戦後のインドの国際的な立ち位置という課題です。冷戦体制がないなかでの非同盟はどのように考えたらいいのだろうかという問題ですね。冷戦後、印米関係はどうするのか、核武装についてはどうするか、環インド洋の地域協力連合とか、そういった新しい問題が出ていました。現代南アジアの6巻は、こういったような問題意識でやったんですね。

今回の事業で素晴らしいなと私が思っているのは、何といっても「不可触民」研究ですね。このテーマについて、若い人々の多くが研究発表するようになりました。格差社会であるインドでの解放に向かって、不可触民が可視化され、見えるようになったということ、あるいは日本の方が本当に研究するようになったというところが素晴らしいと思います。私たちが始めたころは、インドは不変だとか言う人たちがまだいた時代ですから、それから比べると今回は、社会の根底から動くような社会変動に着目して、研究が進んでいるというところが大切だなと私は思っています。

田辺　根底からインドの社会が変わったというコメントをいただきましたが、本当にそれはその通りだと思います。そういうなかでインドの世界的な位置付けの方も大きく変化したわけですけども、それについて、堀本先生から、政治的な観点からあるいは国際関係的な観点から、インドの位置付けがどう変化したかについてお話しいただけますか。

堀本　前回の「南アジア世界の構造変動とネットワーク」のときには、時期的に言えば1990年代がターゲット、そして地域的に言えば、全南アジアであったわけですね。その1990年代の出来事を各国別に見たものが、叢書第3巻の『民主主義のゆくえ』ということなんです。民主主義のゆくえについては、インドだけではなくて他の国もということだったので、焦点が絞りにくかっ

た。インドと他の国々との間に相当大きな発展段階の違いがあるので、論じにくかったということがありました。

今回やりやすかったのは、2000年代は「民主的な政治が、やっぱりいいんだね」という認識が広がってきたことと、現代インドに絞ったということで、焦点が比較的絞りやすかったということがあるだろうと思うんです。しかも、1990年代と今回の2000年代（2000～2009年）との違いは、インド自体が南アジアのなかでは一番大きくグローバル化の影響を受けている。経済的にも、安全保障の観点から見ても。そういうところで、インドがどう変わってきているのかということについては結構よく分かったのかなという印象です。

2000年代のインドを政治的に見たときに、経済もそうかもしれませんが、「インクルーシブ」が一つのキーワードだったと思うんです。それは内政的な意味合いと、グローバル化する世界状況のなかでどうやってインドもそのなかに含まれて発展していくのかという、内外の両面があったと思います。今回はインドの2000年代の評価でしたが、第2期に南アジアにもう一回立ち返ったときに、全体をどう評価するかということになるでしょう。そのときには、おそらくグローバル化がキーワードになるだろうし、やっぱり南アジア各国との関係をどうするのか、という問題をやっていくことになるのかなと思います。

もう一つ言うと、今回の研究テーマに引きつけて考えられる点が、2000年代という時期におけるインドの位置付けという問題です。冷戦後に、フランシス・フクヤマの『歴史の終わり』という本がありました。自由主義と民主主義が勝ったんだということだったのですが、結局、2000年代に入ってみると、やっぱりそうではない。民主主義が進まない。アラブの春の失敗、アメリカのナショナルパワーの低下、そして中国の共産党独裁のなかの経済発展という状況などが出てきて、2000年代の評価はかなり難しくなってきています。そういうなかでインドをどう位置付けるかという問題が、いぜん残ったままになっているということだと思います。

例えば、*The Economist* が毎年、民主主義度（Democracy Index）を出しています。それを見ると2012年では、ノルウェー1位、英国16位、米国21位、日本23位、インド38位です。まあまあかなという印象です。中国は167カ国中142位。当然の結果ですが。こういう状況のなかで、アラブの春の失敗に象徴される「民主主義の後退」（democracy in retreat）をどう考えるのかということはやはり議論になる。それに対して、インドの場合は、ちゃんとやっているようにみえるけれども、果たしてそう言い切れるのかどうか。例えば、Transparency International が出している汚職指数（Corruption Perceptions Index）ではインドは下の方です。

それから、モーディー政権が生まれたことを、どう考えていくのか。そのガバナンスに対する国民の信用、信頼、期待に政権がどう応えていくのかをみるのが、第2期の大きな研究課題になるだろうというふうな印象を持っています。

最後に、世界中を見渡すと、現在の南アジアは相対的な政治的安定性があると思われているよう

な印象があります。中東や東南アジアに比べると、いまの南アジアは比較的イメージがいいんですね。なぜだろうと考えたら、それは中東がひどすぎるからかもしれないけれども、一方では、やっぱりインドが安定しているということかなと思います。それがあるからこそ、投資家は投資にメリットがあるということだけではなくて、政治的リスクが少ないので活発になるということがあると思います。

もう一回、結論的に言いますと、やっぱり次期のテーマは「インクルーシブ」です。どういうふうに内政でも外交でも、包摂的なかたちでしかも民主的に発展していくことができるのか、という辺りがテーマになるのかなという印象です。

田辺　インドで、どうして民主主義が堅持され得たのかということに対して、何かお考えはありますか。

堀本　インドで民主主義が維持された要因について、一番定説的によく言われているのは、イギリス型のシビリアンコントロールと政軍関係をインドが身につけたことが大きいということです。事実、ネルーは独立直後に、軍の総司令官の地位を下げています。理由は簡単で、軍に発言権を持たせない、軍の政治的な影響を削ぐということがあった。さらに、50年代にネルーは軍人同士のパキスタンとの交流を禁止したんですね。この理由も簡単で、「クーデター病」がうつされてしまうといけないからということ。そういうシビリアンコントロールが一つ大きい。もう一つは、官僚制がしっかりしているということ。さらにもう一つは、会議派が支配政党として機能していた、政党制が存続していたということでしょうね。それに対して、パキスタンを見ると、ムスリム連盟が新しい寄せ集めの政党でうまく機能しなかった。

もっと極端に言ってしまうと、インドは民主主義でないと統治できない。あまりにも多様な要素があり過ぎるために、一元的な価値で政治を運営するのは無理なんだということではないかと思います。

例えば、なぜ中国人が、あれだけ一元的に統治できるかと言ったら、やっぱり漢字・漢文化ということがあるだろうと思います。しかし、インドの場合、まとまっているものは何もないです。ヒンドゥー教があるかもしれませんが、政治的な位置付けとしては、ちょっと弱いだろうと思います。そういうことを考えると、インドは民主主義でしか政治運営ができないんじゃないかと私は理解しています。

田辺　ただ現在、官僚支配や会議派一党支配は大きく崩れましたね。そうすると、モーディーの時代になってくると民主主義の意味も変わってくる。むしろ、官僚や会議派的なシステムに頼らないような民主政治のありかたが必要となります。さまざまな民衆がうわぁっといろいろと主張するのをどういうふうに統治していくかという、また別の課題が出てくるような気がします。

堀本　それは本当にそうだと思います。各国で従来の政治とは違う政治をみんなが求めつつあるということがあります。例えば、インドだったらアーム・アードミー党（AAP, 庶民党）が出てきたとか、

アメリカだったらティーパーティーが出てくるとか、タイだったら赤シャツ隊が出てくるとかいう、従来のパターンと異なる政治を、自分たちも入るかたちで発展させようというのが各国で非常に強くなっています。今回 AAP はうまくいかなくてちょっと残念ですが、そういうのをきちんと研究することが重要かもしれません。

要するに、今のどこの国を見ても、民主主義であろうと民主主義でなかろうと、不満をもち、希望と変化を求める人たちに、どう対応していくのかというのが非常に大事になっている。特にインドの場合は、従来型の政治に不満があって、もっと経済発展させろということで、モーディー政権がつくられたということかなという印象を持っています。要するに、ガバナンスの問題でしょうね。

三尾　インドの世界的な位置付けということに関してですけど、1960 年代の冷戦構造があった辺りで、インド的な精神性や非同盟などといった独自の社会思想や政治思想が世界に発信され、一種の輝きをもったということがあると思います。そのなかで、例えば、ヨーガとか音楽とかインドの文化的なものも価値があると人々に思われて、グローバルに流通したところもある。それが今、1990 年代以降、グローバリゼーションが進展するなかで、インドが独自に発信するような価値があるのだろうか。つまりインドは、ただ人口が大きいだけの普通の国になっていくのか、それとも、デモクラシーや経済のありかたについて、世界の他の国とは違う独自性を出し続けていけるような国であり続けるのかということです。

われわれは現代インドをテーマとして研究をしているんですけど、そのなかで出てくるインド的なものは、いったい何で、どういう価値を持っているのかということが、これから先の大きな問題になると思うんです。そういった辺りについて、例えば、デモクラシーの固有のありかたとか、国際政治のなかにおけるインドの独自の価値とか、そういったことに関してのお見通しがあればお聞きしたい。

堀本　冷戦期の 80 年代について考えてみると、世界平和のためにラジーヴ・ガーンディーが全面的な世界軍縮を唱えつつ、同時にリアリスティックな政治を指向していくという二つの側面があり、それらを通じてインドは、独自の発信力・発言権をもっていたと思うんです。ところが、1990 年代以降、特に 2000 年代以降になってみると、そういう歴史的、文化的、文明的な発信力がどうも弱まっている。むしろ経済発展の方が先に出てきてしまって、そういうことを国際会議でもほとんど言わなくなっている。

ただし一方では、インドの持っている発信力は民主主義にあります。明らかにインドは民主主義を一つのソフトパワーにしている。中国との対比で「自分たちは民主主義なんだ。それが、やっぱり世界的に発信できることなんだ」と。しかも、民主主義的に経済発展をしていると。かつてのように、インド文明みたいなものがあまり登場しないなというのはちょっと残念ですが、そういう意味では普通の国になっているけれども、どっこい民主主義を使ってソフトパワーを発揮していると

いうことですね。

田辺　インドは、国際関係でいうと、昔は直接的な軍事的・政治的な影響力はなかったんだけど、むしろ理想主義的なオルタナティブを出すことができた。いまは責任があるので、あまり理想主義的なことを言っても無理だというのはありますね。

堀本　ありますね。

田辺　インドの民主主義ですが、単に憲政的な意味での民主制度というだけではなくて、ガーンディーが出した、さまざまに異なる立場にある人、地主と小作、資本家と労働者とかが、それぞれ自分の立場からものを言いながら、しかし、それを非暴力で話し合いをしていくという民主政治のあり方、これが重要なインド型の民主主義のモデルなんじゃないかなと思います。例えば、タイやバングラデシュなどですと、政治的な対立がもう民主的に統御できないような状態になっている。それに比べて、インドでは、いろいろな人がいろいろなことを言うけども、ちゃんと選挙や社会運動で落ち着くところに落ち着かせるところが、民主的な文化が地に着いているという感じがしますね。

堀本　ガーンディーが弱者をインクルーシブに考えようとした、みんなを含めたかたちで政治的な展開をしようとしたという辺りが、インドの民主主義の起点にあるのは事実だと思うんです。ただガーンディーは大事で基底にあるんだけど、現代にそれをどう生かせるのかということはやや分からないという印象がありますね。

粟屋　ここ数年で、ガーンディーに関する書物がさまざまに日本で出版されていることが目につきます。『今こそ読みたいガンディーの言葉』（古賀勝郎訳）とか、また『身の丈の経済論―ガンディー思想とその系譜』（石井一也著）といった経済思想に関わるものとかがある。単に民主主義ということではない。先ほど、堀本先生は、いま経済が前面に出ているともおっしゃったけれども、少なくとも一部では、温暖化問題やポスト産業資本主義のなかでも、やっぱりガーンディーへの回帰はいつまでも続いていく可能性はあるんじゃないかなと思います。

堀本　なぜですかね。

粟屋　やはり、ぜいたくに飽きるというか（会場　笑）。限界を認識し始めるというのは、いろいろなところで出てきていると思うんですね。そういったときに立ち返る一つの思想としてガーンディー主義はあるのではないでしょうか。

長崎　私は、環境に関してガーンディーが出てくるのは、ある程度は分かるんですけど、インド国内の政治や社会の再編については、ガーンディーの非暴力だけでは駄目だったと思いますね。イギリスに対しては非暴力で運動をやったということはあるけれども、国内改革については、アンベードカルの力が非常に大きくて、ガーンディーだけでは無理だと、みんな思っているのではないでしょうか。

粟屋　私がさっきエピソード的に言ったのは、ポスト産業社会に生きる人間が、ガーンディーに、これから先も魅力を感じる可能性です。ただ、一つ付け加えたいのは、ガーンディーの思想自体も、ダリトなどの運動に対しての限界がそもそもあったということ以上に、政治的・歴史的な流れから、アンベードカルとの決定的な対立などがあって、その後の歴史のなかで、その衝突や対立というものが、ダリトの運動家によって固定化されていったということもあると思うんですね。ダリトに関しては、圧倒的に、ガーンディーの影響力は低下してしまったと思うけれども、それは政治的な力学もあってのことでしょう。

長崎　そうですね。

粟屋　ただ、このごろ気が付くのは、プロ・ダリトのスタンスに立つ、出身はダリトではないかもしれない人が、ガーンディーをそれなりに評価し、またアンベードカルを支持するといった両面併記をするということです。だから、絶対的にガーンディーが否定されているわけではない。また、ダリト以外の女性運動に関して見れば、やはり確信犯的にガーンディー主義をとるということは、まだまだよく見掛けることです。

長崎　それはそうですが、インドが独立できたという点では、ガーンディーの右に出る人はいませんね。やっぱりガーンディーの指導があったからインドの独立が可能になったので、同時に、近代文明の結果、支配的な国家体制ができたことを批判したという点では、私は、やっぱり、ガーンディーの役割は決定的だったと思いますよ。

粟屋　いや、石坂さんなども言っていますが、ガーンディーにとっては、国家の独立というのは二次的な問題なんですね。女性運動の活動家たちが解釈するガーンディー主義は、ジェンダー的な点から評価するということがある。また環境運動においても、独立とかいう問題ではなく、環境的な観点から解釈されて、ガーンディー主義は影響力を持ち続けると私自身は見ています。

長崎　それに反対するわけではないですけれど、ガーンディーがいなかったらインドの独立はなかったろうなと私は普通に思います。その点は、ガーンディーを評価するのは当然だと私は思っているんですね。ただ、その後の社会ですよね。ガーンディーとしては社会変革をやることによって独立を勝ち取っていくのだと考えたと思うんですけども、しかし、結果としては、その社会変革のなかで一番大事な不可触民の問題を解決するということができなかった。ガーンディーとアンベードカルの対立は、どちらが悪かったとかいう話ではないのですけれども、しかし、ガーンディーがアンベードカルを説得して同志にすることができなかったという事実は残ります。そういう意味では、私が考えているのは、ある種の２段階に分かれてしまったなということです。インドが独立するというのが第１段階ですけど、今度は、その次の社会変革の課題が第２段階として出てきているな、と思っています。

田辺　民族運動において、どの程度、多様な主張や視角を取り入れられたのか。あるいは、国家独立というアジェンダの前に、社会改革は先送りされてしまったのか。この辺りは、まだこれから研

究をしていくべきことかなと思います。特に、いまの議論のなかで出てきたのは、社会改革の問題ですね。女性やダリトなどのさまざまな人びとのニーズや主張が、どう生かされる民主的な社会になっていくのか。そのインド的なデモクラシーが、われわれの民主社会にオルタナティブとして希望を与え得るのか。こうしたことを、私たちが研究していけたらと思います。

いま、さまざまな人びとが主張をするようになったインド社会ですが、その一つの側面としては、社会経済的な大きな変化があったと思います。その辺りについて、東大拠点ではどういう研究成果があったか、佐藤さんの方からお話しいただけますか。

佐藤　アンガス・マディソンが作成した植民地時代からのインドのGDP統計と、インド政府のGDP統計を結合してみますと、1900年から現在までの、一人当たりGDPの推移をグラフに描くことができます。これを見ますと、第1に停滞の時代が1900年から独立前、第2にヒンドゥー的成長の時代が独立後から1980年、第3に高度成長の時代が1980年から現在まで、これらの3つの時期をはっきりと識別できます。さらに、最後の高度成長の時代においては、2003年から高度成長がさらに加速しているということがわかります。

1900年から、一人当たりGDPが倍になるのに要した年数が88年です。だから、1900年から1988年になって初めて、一人当たり所得が倍になりました。これに対して、2001年から2012年のたった12年間で、一人当たり所得が倍になっています。このように、現代インドは、歴史上、経験したことのない未曽有の高度成長局面に入っています。現代インドの変容を考える上で、まず第一に押さえるべき点は、高度成長や社会経済の激動にあると思います。

東大拠点では、この高度成長の背景として、経済自由化すなわちグローバリゼーションだけに注目するのではなく、次のような諸側面にも着目しています。第1に、植民地時代からの長期的な歴史的、空間的変化。第2に、緑の革命に代表される、独立後の農業革命。第3に、州ごとの発展パターンの共通性と相違点。具体的にはパンジャーブ型、ビハール型、タミル・ナードゥ型といったような、州発展パターンの類型研究。第4に、独立後の輸入代替工業化戦略の再評価。第5に、企業発展や産業構造の変化。これらに目を向け、本格的な分析対象にしています。

とりわけ長期的な歴史的、空間的変化については、「都市と農村の溶融」というコンセプトで議論を深めてきました。これは「都市化」という言葉では十分、拾うことができないと思われる、労働者の農村から都市への通勤や、都市に住む農民の都市から農村への通勤、都市郊外の商業宅地開発、農村における大規模工場の立地、という事象などについて理解するための枠組です。この溶融現象を含め、長期的な歴史的、空間的変化に関する分析については、東大拠点では、地理情報システム（GIS）を大いに活用しています。

東大拠点では、高度成長が、どのようなインパクトをもたらしたのかという問題意識を持った研究もされてきました。特に特記すべきなのは、開発が生み出す環境問題、共有地問題に関する研究

でしょう。高度成長が、絶対的貧困状態を緩和していることを否定することは極めて難しいと言えます。しかしながら、成長が、所得や消費では計れない、生活の質を高めているのかどうかについては慎重に考える必要があります。例えば、東大拠点では、自殺、健康水準の緩慢な改善、所得分配などの諸問題にも目配りしています。

一つだけ、ここで事例を挙げます。私が『激動のインド』シリーズ第3巻で行った、ちょっと幅を持った推定では、インド全体の労働分配率が1980年の56％–67％から、2007年には47％–59％にまで悪化しています。高度成長のなか、労働者の取り分が相対的に少なくなってきています。世界の大富豪ランキングなどを見ても、リライアンスのアンバニ兄弟を始めとして、たくさんのインド人がランクインしています。資本家の取り分が成長と共に、ますます大きくなっているというわけです。最近フランス人経済学者のトマ・ピケティが『21世紀の資本論』という本を執筆しました。フランスや米国ではベストセラーになっています。この本は、先進国では、近年、所得分配が大きく悪化していることを説得的な証拠を用いて指摘し、大きな反響を呼びました。インドでも所得分配の問題が重要になってくるように思います。

東大拠点の特徴としては、公費で購入した資料は委細漏らさず全てウェブ上で公開しています。インドの新聞でも取り上げられた地名検索、さらには大英博物館のインド関係資料目録、GISを用いた非常に多数にわたる地図、統計分析のためのプログラム一式、研究会報告資料などです。

以上、東大拠点がいままで行ってきた成果のごく一端をお話しさせていただきました。

ここで自分自身の考えも少しだけ述べたいと思いますが、ポイントは二つあります。一つは、国民国家としてのインドが、グローバリゼーションによって上に引っ張られていく動きと、もう一つは、1990年代前半にあった、憲法改正による地方分権化という下に引っ張られる動きの双方に直面しているということ。そういう国民国家としてのインドが今後どうなっていくのだろうかという問題が一つ。もう一つは、「グローバル・ヒストリーと開発経済学」というテーマです。

私自身は、グローバリゼーションの研究を過去23年間、やってきました。同時に、マイクロクレジット政策である統合農村開発計画（IRDP）に関する研究を細々と継続してきました。自分自身は、これらグローバリゼーションの研究と貧困緩和研究が、ばらばらのものだとは必ずしも思っていません。国民国家としてのインドが、グローバル化で、関税を引き下げていくといったような、あるいは、資本の自由化をしていくと、1国だけで金融政策を行うことが非常に難しくなってくるような、国家主権がグローバリゼーションと共に喪失している過程があるわけですね。一方では、1990年代の初頭にあった地方分権化があります。パンチャーヤットに5年ごとの定期選挙を義務付け、十分とは言えませんが自治権を与えて、パンチャーヤットが貧困緩和計画の実施主体になっていくというものです。グローバリゼーションと地方分権化との二つの動きに引き裂かれるような状況になって、国民国家としてのインドは、どのようにそれに対応していくのかということが、とりわけ1990年代以降のインドを考えていく上で大事なんだろうと思います。

二つ目は、グローバル・ヒストリーと開発経済学です。実は最近の開発経済学のなかでは、17 世紀以降の植民地支配の影響が現代の経済パフォーマンスにかなり深く影響を与えているんだという研究が非常に盛んに行われています。例えば、MIT の Abhijit Banerjee と Lakshmi Iyer が、*American Economic Review* という雑誌に、Baden-Powell の *The Land-Systems of British India* のデータなどを使い、ザミーンダーリー制度の地域とライヤットワーリー制度の地域について県ごとでデータを集計して比較しました。その結果、どうやらザミーンダーリー地域の経済パフォーマンスは独立後、非常に悪いということがわかりました。いろいろなファクターを取り除いても、植民地時代の地税制度が、独立後の州ごとあるいは県ごとの経済パフォーマンスに強い影響を与えているんだということです。歴史研究と、最先端の開発経済学研究との融合が、今後の研究アジェンダとして重要なのではないかと感じています。

粟屋　文化社会的な変動と、佐藤さんがはっきりおっしゃった経済的な大変動、それらの領域の関連について、田辺さんは最初に「議論が進んだ」とおっしゃいました。けれども、私自身としては、第１期では、文化社会的また政治的な変動と、経済的な激変とが、どう融合的に結びついているかというところが十分研究できていなかったところがあったと思います。それで、佐藤さんが、分権化の問題を経済専門の立場から、国民国家の問題を含めて関心をお持ちになってやるべきだとおっしゃってくださったのは非常に心強いのではないかと思いました。国民国家という問題だけではなくて、インドの民主主義にも当然絡んでくるテーマであろうと思いますし。

それから、第１期に関しては、やはり歴史の問題が若干弱かったと思います。全ての問題に対して歴史的なバックグラウンドから掘り起こして現在の激動をより深く理解するという意識的な努力がやや弱かった、あるいは、それをやる余裕がなかった、というのが第１期に関する私自身の反省でもありますので、これについても佐藤さんがおっしゃってくださったのはよろしかったかなと、私は思いました。

田辺　国民国家がグローバル化と分権化に引き裂かれているという論点について一言。グローバル化と分権化が同時に起きているということは、ネオリベラリズムとの関連でよく議論されることだと思うんですね。しかし、では、インド政府が経済は市場に全てを任せ、政治的な責任は地方に投げているのかというと、私は必ずしも、そうではないと考えています。むしろ、人間開発を行いヒューマンリソースをつくるための福祉領域については、中央政府が多額の予算を投入し、人材育成メカニズムも充実させようしている。人びとの主体化の進展を通じた経済発展と民主主義の同時的進展をめざしているところが、先進国のネオリベラリズムにおけるセーフティネットとはずいぶん違うところだと思います。それが、地方分権における、下からの多様な民衆の主体化ということとも結びついている。

私はこうした体制を「開発民主主義」と呼んでいます。国家はもう経済開発の主導はしていませんが、ヒューマンリソースを開発する責任を持ち続けています。またこの動きは、社会経済政治へ

の参加を求める人びとの要求、すなわち下からの民主主義の活性化とも結びついています。ですから、佐藤さんの指摘は非常に面白いのですが、国民国家が引き裂かれるだけなのかというとそうではなく、インド国家は機能を大きく変化させつつも、新興国の政府として独自の役割を担い続けているのではないかと思いました。

佐藤　おっしゃる通りで、方向性としては、グローバル化と地方分権化が進んでインドの国民国家が引き裂かれようとしているんだけども、当然、それに対するリアクションとして、新しいかたちの国家形態を中央政府は模索しているのではないかと思います。特に、今回のモーディー政権に対して、あれだけ国民が熱狂したのはその現れかもしれません。

最近、読んだペーパーによると、BJP が勝ったのではなくて、モーディーが勝ったんだということですね。これは、人びとが強いリーダーシップを求めているという側面があるのかなと思います。しかし、モーディー首相が、そういう国民の期待に対してどれほど応えられるのかが問題になるでしょう。これはかつての vote-bank（注：インドの選挙において、特定の宗派・カースト・言語などのコミュニティが特定の候補者や政党に投票するという投票行動を指していた。1990 年代以降、それほど顕著ではなくなったとも言われる。）ですか、国民会議派のような、ネットワークを通じて票を獲得していくというタイプの政治体制とは、やっぱり違うと思いますし、統治体制も違ってくると思うんですよね。その模索過程みたいな感じですかね。

岡橋　地方分権という話がありましたけど、パンチャーヤットの話は確かにそうなんですけど、世界的に見て非常に重要なのは、インドは多様な地域が連合していることではないでしょうか。EU にたとえられることもあるぐらいですね。一時期は、分離独立の動きを示した地域もあったし、いまでも若干あると思うんですけど、いまは、むしろ非常に州が分裂していっていますよね、2000 年前後から。州は現在、連邦国家で極めて強い力を持っていて、州をどう見るかが課題となると思います。そして、州ごとにどういうシステムの違いがあるのか、が重要です。中央政府の統合性は当たり前だけども、州ごとの違いというのは相当ある。これは政治研究の領域でも知られていることで、この辺の話をもっと詰めていく必要があるでしょう。

最近も、アーンドラ・プラデーシュ州が二つに分裂しましたね。かなりの数の州が分裂してきているので、これをどう見るか。自由化以降にこれは進んでいますけども、どういう経済的な動きと連動して、これが出てきているのかというメカニズムを知りたいなと思います。

田辺　中央・地方関係が、政治的にだけでなく、経済発展にも大きな影響を与えているんですね。

堀本　確かに、それは本当に大きな問題です。例えば、70 年間を振り返ったときに、会議派は比較的、新州創設については慎重でしたよね。インド人民党の場合は「もっと増やせ」ですよ。それが、今なぜ会議派政権時代に州分割が起きているのか。

それはつまり選挙のため、vote-bank を確保しなければならなかったということがあったから、という単純な話だけではなくて、インドの政治システムとして考えたときに、どういう意味をもつのかについて考える必要がある。インドの州は将来的にこれからも増えると思います。州の分裂が進むことと、パンチャーヤットなどへの分権化が進んだということとが、どういうかたちでリンクしていって、中央の政治と地方の政治がいかなる関係をつくっていくのかは面白い問題だと思います。

ただし、モーディーを見ていると、70 年代初めにインディラ・ガーンディーが出てきて、Prime Minister Office（首相府）をどんどん権限強化したことを思い出します。ある意味では、今のモーディーは、70 年代初めのインディラ・ガーンディーと同じような政治運営をしているのではないかとも思えます。しかし結局、インディラ・ガーンディーは失敗するんです。という辺りで見ると、インドの政治は、やっぱり、ある程度、官僚に頼らざるを得ない。連邦制で、しかも地方に官僚がいる。統治のための仕組みは何かがいるので、その辺が、どうなるのかを見るのはとても面白いだろうなと思っています。

田辺　ただ、インディラ・ガーンディーのときのような権威主義体制、官僚制に戻るのかというと、いま、民衆の方も、さまざまな自分の利害や価値に非常に意識的ですし、モーディーは、官僚だけではないような、さまざまな方面の知恵や知識を自分のところにどう集めるかに非常に意識的な人であるように思われます。ですから、インディラ・ガーンディーへの回帰ということでは捉えられないのではないでしょうか。

堀本　回帰とは言いません。回帰ではない。やっていることが、よく似ているなという。

粟屋　インディラ・ガーンディーと対比するよりも、グローバル化のなかでいろいろな国で起こっている、安倍政権やブッシュとか、そっちの方に近いんじゃないかと私は思います。

田辺　安倍と近いということですか。

粟屋　いや。ネオリベラリズムに関連するようなさまざまな現象がありますよね。例えば、議会制民主主義の地盤低下とか、ポピュリズムとか、そういった現象。21 世紀以降の経済のグローバル化現象のなかでの共通性の方が、インディラ・ガーンディーに立ち戻るよりも近いかなと。

田辺　ただし、一般的に先進国で言われているような議会制民主主義への不信という点で比較して言うと、インドでの投票率は高い。

粟屋　日本が低過ぎるということもあるんですけど、ヨーロッパとかだと、そんなに低くないんですよね。60％、70％はいっているんじゃないんですか。

藤田　州の重要性に関連してずっと気になっているのは、州政府のガバナンス能力にものすごい格差があって、それがいろいろ大きな影響を与えているという点です。それにもかかわらず、最近、成績が悪かった州でよくやっている州があるんですね。例えば、チャッティースガル州とか、マディヤ・プラデーシュ州だとか、一部、ラジャスターン州もそうです。そういう動きが

今後、所得格差拡大の傾向を変えていく契機になるかもしれないと見ています。州政府のガバナンスの問題はいろいろな側面に通じるものがあると思うんです。その辺を、われわれの今後の課題として少し重点的に研究したらどうかなと考えています。

田辺　中央・地方関係の変化は、より一般的に言うと、空間構造の変化と大きく関わると思います。また、グローバル化にともなう人やものや資本の移動やつながりの進展もあるわけですけども、こうした空間構造の変化について、広大拠点でどういう研究成果を出されたか、岡橋先生の方からお願いします。

岡橋　インドのような大きな国は、いろいろな空間単位にブレークダウンして考えるということが結構、地域研究で有効ではないかと私は思っています。どういう単位が有効かと考えるのが大変、重要です。州は、もちろんですけど、州だけではいけないと思うんですね。日本でも、だいたい都道府県でやる研究者が多いですけど、本当に、それがベストかというと、もっと違った切り口もあるのではと考えるのが、われわれの仕事かなと思っております。

結構われわれが貢献できたと思っているのは、フィールドワークをもとにした産業や経済の研究、例えばITや自動車産業などそういう個別産業の研究ですね。あとは、大都市そのものの研究が、やっぱりこれまでこの分野は相対的に弱かったですよね。水島先生なども、どちらかというと農村を中心にやっておられたこともあって、われわれは、だんだん大都市の方に、特に郊外開発にシフトしていったので、その点でも、うまく分担できたのかなと思っています。

インドの経済発展が、具体的な空間としては特定の大都市の郊外を中心に起こっている、ほとんど、そこが受け皿になっているという点が大変、私は重要だと思っています。計画経済では政策的に分散させていたので、自由な産業立地ができなかった。それが緩んだことによって、マルチ・スズキなんかを見たら分かるように、全国分散しないんですよね。

スズキに行って僕は話をしたことがあります。普通はインドの北と南で二極立地をするんじゃないんですかと。でも、「われわれは、そんな方法を採らない。北でいく」と言う。自動車産業というのは、集積の効果が非常にあるんです。だから、北インドでまとめてやっていこうということでしょう。こういうことは、いままででは考えられなかったことで、自動車産業は、経済発展をリードしている面はあるけれども、地域格差を拡大させる可能性のある産業ではないかなと思っています。

その点、ITの方は、鍬塚さんが調べて分かったのは、結構、地方にも出ていると。やっぱり人材が重要なので、大都市の供給量は大きいですけども、地方の都市にも結構、人材供給力があって、そんなに大きな設備が要らないので、現場で人を集めていくというような動きはあります。そういう点では、産業ごとに違った動きを示していて面白いなと思うんですね。いずれにしても、こういう産業発展と地域の発展が、どう絡んでいくのかは、結構、重要なポイントなのかなと思っています。

あとは、巨大な開発が起こったことによって、農村がどう変わっているのかということが問題です。近郊農村では激しい変化で、土地収用問題などいろいろ起こっています。中国ほどではないんです

けど、いまインドでも、ものすごくややこしい時代になってきています。土地を売却した後、われわれにまた分け前をよこせというような、いろいろな反対運動が起こってたりしています。郊外農村の問題もフォローしていく必要があると思いますね。

結局、大都市は重要なんだけども、「大都市が重要だ」だけではもの足りないので、もっと巨大な、大都市が連坦した広域の産業集積として、メガリージョンが重要だということを私は言い続けています。いま、グジャラートを介してムンバイまで高速貨物鉄道で結ぼうという構想は、まさにメガリージョンを促進しようという計画ですよね。だから、おそらく、その方向にいく理由があるはずで、これをモニタリングする必要があると思います。

もう一つは、さっきから出ている州の問題ですね。僕が非常に関心を持っているのは、州のなかには低開発地域という一つのカテゴリーが明確にあるんですけども、どうも、そのなかでの動きが、多様化してきていて、ヒマラヤ山岳地域でも結構、発展しているところがあったりする。例えば、私たちが今回、調査したウッタラーカンドは、新州なんだけども、非常にガバナンスのレベルは高いですね。思い切った政策をすごいスピードで打っているんですよ。あっという間に大規模工業団地を受け入れるだけのガバナンスがある。そこに、どんどん企業が来て、一躍、工業地域になっているわけです。

こうしたことは非常に重要で、インドでは、州を単位とした研究はやっぱり重要なのかなと思います。僕は経済が中心ですが、文化、社会、政治も含めてです。ウッタラーカンドなんかは、文化的、歴史的なバックグラウンドが非常に大きいですね。石坂さんも言われていますけど、自主的な住民運動の歴史とかがあります。インドの場合、そういうものに非常に地域差がある。

あと、政治の問題は極めて重要で、昔は中央政府が圧倒的に強い力で主導してきたんだけど、いまの流れはそれをより小さな単位に分解していっていますね。インドに限らず、国家のリスケーリング論（state rescaling）が今盛んに議論されています。要するに、地方のスケールを国家が適度に変えていくということです。例えば日本の平成の市町村合併も、それなんですよ。行政的な空間単位をいじっていくんですね。インドの場合も、そういうことが動いていると見た方がいいと思います。それは新自由主義だけでは説明できないですが、明らかに経済発展との関係があるんですね。州が経済発展に非常に重要な意味を持ってきていることは間違いありません。パンチャーヤットという、もっと下のレベルでも、そういうリスケーリングが起こっています。国家のリスケーリング論は結構いろいろな学問分野がカバーできるテーマかなと思いますね。

堀本　いまインドで州も新しくなっているし、同時に県（district）を新しくつくるじゃないですか。つまり、政治的な地域がどんどん変わっているんですよ。それって、たぶん州議会選挙、国会議員選挙との関係もあるだろうし、研究すると面白いだろうなと思います。

岡橋　空間や地域の再編成がかなり進んでいるので、その辺を総合的に研究すると面白い話になると思います。もちろん経済も政治も社会もね。

田辺　リスケーリングが新自由主義だけでは説明できないとすると、やはりガバナンスの問題が、そこに関わってくるという意味で捉えていらっしゃるんですね。

岡橋　そういうことですね。インドで言えばね。最近ちょっと見た本では、インドの大都市は注目されているけど、インドの小都市はどうかという話があって、やっぱり小都市は惨憺たる事態なんですね。都市はインフラをどんどん整備しなくてはいけない。どんどん人がやってくる。しかし、それができない。お金がない。大都市はまだいいけど、実は小都市が問題だという議論です。小都市が相当いま膨らんできている。しかし都市整備がついていっていない。それは、おそらくガバナンスの問題なんですよ。

三尾　県がどんどん増えていくとか、そういう空間のブレークダウンにおいて、どういう単位で分けようという話になるんですかね。例えば、経済であるとか、交通のネットワークとか、そういうことで分けていこうという発想になるんですか。それとも、もっとずっとさかのぼったときの、例えば言葉であるとか、社会的なつながり、通婚圏とか、そこの支配的なジャーティの広がりとか、そういう何か基盤があるのでしょうか。

岡橋　県の場合は、基本的に、日本でもそうだけど、人口が郊外でどんどん増えるじゃないですか。それを分割していくんですよね。ウッタル・プラデーシュのデリーに近いところは、どんどん、ゴウタム・ブッド・ナガル県とか新しいのに分解していくわけですよ。非常に巨大な人口になっていくとガバナンスができないから、分解するというのが一つの流れですね、都市の郊外で。

田辺　ただ、おそらく文化社会とのつながりもあると思うんですね。大きさで言うと、やはり小王国の単位が基本的なものとしてあって、小王国の単位は通婚圏とも重なるということが、もともとあります。

三尾　あえて質問したのは、もっと長い歴史的な継続のなかの範囲や領域性というか、そういう話としてなんですけど。

田辺　それと、しかし、やはり現代の経済や政治でどう効率的にガバナンスできるかという問題がある。両者が重なっているということでしょうか。

岡橋　そういうことですね。

堀本　もうひとつ、例えば今回のアーンドラ・プラデーシュ州の分割を見ても、要するに自分たちが持っている政治的な影響圏を拡大したい、単純に言えば、もっと利権を獲得したいというのは明らかにありますよ。つまり、自分たちが持っていた発言権が弱かったから、分裂することによって、新しいところで政治的な発言を強くすると。

岡橋　その場合、財源的なものは大丈夫なんですかね。

堀本　大丈夫じゃないと思います。（会場　笑）

岡橋　分割するのは、いいんですよね。アイデンティティを保てる単位に分けていくのは。しかし、日本でも同じだけども、結局、地方はお金がないわけですよ。すると、結局、中央からの財政移転

に頼るしかない。そこに非常に根本的な問題があるわけです。どんどん工業化が進んで、お金がどんどん入るようなところはいいですよね。そうでないところで、むしろ分割している。チャッティースガルとかね。あれは、どうなるのかという問題がありますね。単に分ければよいという問題でもない。

堀本　そうそう。だから、そういう意味では、モーディーが地方への財政配分をどうするかを見ることで、その統治スタイルが見えてくるのではないでしょうか。たぶん、モーディーがやることは明らかに、中央の指令が行きやすいかたちを取る。財源の分配についても自分たちがコントロールしやすいものを考えるだろうと思います。

三尾　そういう現代風な政治経済の論理とは別に、インド亜大陸の非常に長い潮流もあるのではないでしょうか。中国との比較で言ったら、中国は常に中央集権的な巨大な帝国があるというかたちですよね。それに対して、インド亜大陸は、中央集権的な政治勢力が成立した期間は短くて、出来上がったとしても、たかだか数十年でばらばら分権化していく。ムガル帝国だってそうでした。そういう位相で現代の状況も考えておく必要があるのではないかと思います。

さっき佐藤さんがおっしゃったような、国民国家が地方分権とグローバリゼーションに引き裂かれるという流れについても、歴史的な観点から考えた方がいいのではないかと思っています。そのなかで、国民国家がイマジネーションとして共有できているのか。インドがずっと統一体としてあるべきだというのは共有できている夢なんですかね。それとも、どんどんブレークダウンしていってなくなっていくものなんだろうか。

堀本　1956年の言語を単位とした州再編は、分離独立傾向を抑えるためにやったんでしょう。それをずっと繰り返して、分離独立要求はもうやらなくても済むようになってきた。そういう意味で言うと、国民国家論はインドの政治のなかでもう議論されていないような気がするんですよ。

三尾　もう当たり前になってしまったと。

堀本　うん、当たり前になったから。そういうところで、地方主義というか、それぞれの政治家が地方の権益を高めようとしているのが現代の構図なのかなという印象があります。例えば、日本で言えば、愛媛県がもともと4つの藩で成り立っていますよね。それが一つの政治ユニットになったという経緯があります。そのなかでそれぞれが、どういう展開の仕方をするというのは、やっぱり面白いと思うんですけどね。

田辺　あとは、ガバナンスと言ったときに、特定の機能を国家がさまざまな単位で果たすことが重要です。制度的・物理的なインフラ整備ということ、またヒューマンリソースの促進ということ、こうした機能は、これまでの集権か分権かというだけでは捉えられないような、新たな国家の姿なのかなと思います。

堀本　そういう意味で言うと、スコットランドが独立に失敗しましたけれども、あれは面白い（会場　笑）。スコットランドの分権化については、インドも、みんな関心を持って見ていると思いますよ。

三尾　特にインドの話では、いわゆる北東のセブン・シスターズとか。あの方々はスコットランド

の動きなんかを注視されていたのかもしれないと思ったりしますね。

粟屋　そのこともありますけれど、現在の国民国家の地図上の区分が当たり前になっているというのはちょっと単純化し過ぎているかもしれないです。

岡橋　まだ係争地域があるんですよね。中国との間は。気を付けなきゃいかんですね。

粟屋　ええ。北東の一部の方もそうだろうし、それからカシミール。これからも国境は変わっていく可能性は、あるだろうと思いますし。

田辺　地方からの声が挙がる。またジェンダーの視点からの主張がある。あるいはダリトの声が挙がる。そうした下からの動きをどうまとめあげて、ポジティブな民主主義や経済発展に持っていくのか。そうした苦労が統治のあり方のリストラクチャリングやリスケーリングとなって現れてきているところかと思います。ここで、民衆の下からの参加という観点から、現代インドの変容をどう見ることができるのか。そして、そこに、インドの長い思想や価値という面から見て、どういう特徴があるのかということについて、嵩先生の方からお話しいただけますか。

嵩　龍谷拠点では、まずひとつは、龍谷大学のインド古典知の研究の蓄積を、現代インドの政治経済における変容のダイナミズムとどう結びつけるのかを考えてきました。最初に田辺先生が、現代インドの一つの大きな特色・側面として、多様な民衆の主体化ということを指摘されましたが、龍谷拠点が今回、特に焦点を当てたことの一つは、現代インドにおける仏教改宗運動でした。

そのために、改宗仏教徒を中心とした下層民の運動の研究、下層民の村落調査を行いつつ、インド現代史の研究者らとチームを組み、数回にわたって現地を視察し、現代インドにおける下層民の向上と格差社会の解消の実態について研究を進めてきました。そのことにより、現代インド社会における下層民の公共参加という観点から、現代インドの変容をどう見るのかについて、ある程度、方向性が見えてきたのではないかと思います。すなわち、格差社会の解消のための運動というこちら側の予測をはるかに超えた、言わば下層民の台頭という実態が明らかになりました。

他方、インド古典知の研究と現代インドの政治経済における変容のダイナミズムとの融合の試みでは、インドにおける宗教・文化の多様性に着目した研究、特に古代から現代に至るダルマ概念の変遷についての分析・研究を行いました。そのことにより、ヒンドゥー教、仏教にそれぞれ内在するダルマ概念に多様性と統合との間の緊張関係がすでに存在していたことが示唆され、それが現代インド地域における政治や社会運動、宗教活動などの諸領域にも重大な作用を及ぼしていることがある程度明らかになりました。

先ほど堀本先生から、インドはとても多様で重層的な側面を持つが、民主主義が、現代インドを理解する上での大きな一つのポイントになるのではないかというご指摘があったと思います。同様に、われわれは「ダルマ」と言うと、ある特定の宗教の拠り所になるような考え方だと固定的に捉え

がちなわけですが、ダルマという概念そのものが非常に多様、あるいは多元的なものを許すような意味合いを持っている。そのような古典知が、インドの長い歴史の基層に流れている。その意味で、当面はダルマという概念から追求していくことになると思いますが、現代インドの政治経済における変容のダイナミズムとの融合の試みを進めていきたいと思います。

それから、先ほど粟屋先生の方から、日本の社会のなかで、現在ガーンディーが再度、取り上げられることが多くなってきているのではないかという指摘がありました。私なんかも、やはりイメージとしては、ガーンディーがインドの民衆の拠り所になっているのではないかという思いがあったのですが、実は、あにはからんや、フィールドに行ってわれわれが目にするのは各地にあるアンベードカルの像でしたし、民衆の間にアンベードカルという人に対する思いが強い。

アンベードカルは有名な『ブッダとそのダンマ』という著作を書いていますが、彼の説くダンマというものは、われわれ仏教を専門で勉強している者から見ると、伝統的に理解されているところと違う幅を持った側面があります。これは、いまの民衆の社会参加の上で、アンベードカルが果たした役割ということでも大きな意味があります。インド的な価値や理念が、現代の政治や社会にどのように生かせるかというところで言うと、アンベードカルが捉えたダンマというものも、多様性、多元性を含みつつ、社会に対してエンゲージするという側面があると思うわけです。

今後、龍谷拠点としては、思想研究からさらに進めて、社会的な価値や民衆の価値を含めた、現代インド社会のダイナミズムを研究していけるのではないかと考えています。

長崎　余談なんですけど、銅像について。1960 年代にはまだイギリス人のいろんな銅像があったんですよね。だけどその次にインドに行ったら、今度は圧倒的にガーンディーだったんですよ。ところがその次は、今度はガーンディーも消えかかっていました。そしてその次は、今度はアンベードカルだったんですよ、圧倒的に。ガーンディーはないんですね。

だから、インドのなかでも、ある時期に非常に尊敬を集めた人がずっとそこにいるという感じはありません。日本でも、もちろん、戦争が終わった後は、将軍の銅像はみんな消えましたから、そういうことはあり得るんですけど、その変化が速いんですよね、インドの場合は。そういうふうに価値観が変わっていくということも考えて、インドは見た方がいいかなと思います。

田辺　価値観、確かに変わっていますね。ダリトなど下からの公共参加は、インドの社会運動や文化運動の動態とも非常に関わっていると思います。社会運動の観点から、現代インドの変容をどう見ることができるかについて、粟屋さん、いかがでしょうか。

粟屋　外大拠点は、周縁に位置付けられた人たちの運動や主張に光を当ててこようとしました。その過程で明らかになってきた現代の特徴は、そういった運動や主張がさらに細分化しているということです。「多元的」「重層的」という言葉で表現される側面があるのですけれども、さらに細分化しているということもあると思うんですね。それがポジティブかネガティブかというのは、これから見ていかなければいけません。どっちに転ぶかは分からない。

「アイデンティティ・ポリティクス」という言葉は、まだ生き残っているし、これからも残っていくだろうと思います。アイデンティティ・ポリティクスと一言で言っても、そのアイデンティティの単位となるものが、もっと小さくなってきている。州単位で、ぼこぼこと小さい運動などが次々と生まれているのが2000年代以降、あるいはもうちょっと前からの1990年代以降の流れで、現在さらにその傾向が強まっているのかなという印象です。

そういう個々の、さまざまな、分散化する、あるいは個別化していく多くの運動、それらの細分化の傾向をどう理解するのか。21世紀のグローバルな世界のなかで、どう位置付けるのか、という問題があります。これは、インド独自の民主主義や価値の発信という視点からも重要だとは思うんですけれども、ある程度、他の地域との共通部分ということにも目を向ける必要があるでしょう。他との比較で、インドの特殊性が初めて理解できるのではないかと、私自身は考えています。

また個別化や細分化のベクトルと同時に、それらをまとめるという力学も常に働きます。インドの場合、21世紀初頭から、全国化するネットワークをつくるという動きもあったわけです。例えば、非正規の労働者をどうにか全国的にまとめようと組織する動きであるとか、セックスワーカーが全国組織を立ち上げようという動きとかです。

全国組織のなかに加わってきている人びとのなかには、セックスワーカーに典型的に見られるように、これまでみられなかった集団もあります。田辺さんの表現を借りて「多様な民衆の主体化」と言ったならば、その「多様」ななかの新しい要素として、そういった人びと、集団もあるわけです。だから、民衆について一枚岩で語ることの危険性を自覚するべきであろうと思います。差別や排除というものも、その実際の表れ方は複雑化しています。

ジェンダー研究に限って言えば、これは特定領域研究のときの最初を思い出すんですね。特定領域のときには、ジェンダー班というものが、はっきりとありました。特定領域の旗揚げの集まりがあったときに、代表の押川さんが出張中だったので、ピンチヒッターとして私が意思表明をやったわけです。そのときにも言ったことですが、ジェンダーというのは、一つあれば、そこにお任せしておけばいいという問題ではなくて、本来だったらば、特に「ジェンダー班」みたいなものがなくても、他のところで全てジェンダーが有機的に位置付けられるというのが一番、理想的なパターンだと思います。その立ち上げのときも、ジェンダー班があるからといって、他の班がジェンダーの視点を忘れないでほしいということを言いました。今回も、残念ながらジェンダーのゲットー化という問題が、どこまでクリアされたのかに疑問があります。

私自身は、ジェンダーで全てが分かるわけではないけれども、あらゆる問題を考えるのに、ジェンダーの視角を落としたらば、全面的・総体的な理解はできないという立場です。ジェンダーに関しても、特に1990年代以降、2000年代以降、やはり個別化があり、セックスワーカーやセックスマイノリティという新しい要素が入ってきたというのは注目されます。

理論的な側面で言うと、私自身が危惧するのは、インドのフェミニズム運動が持ってきた運動と

理論との緊密な関係がやや希薄になりつつあるなということです。現地のリアルな社会では、ぼこぼこと新たな運動が起こっている一方で、理論的な精緻化が極端に進んでいるという状況です。2000年代初頭ぐらいまでは、「強制的異性愛主義」なんていう言葉は、インドのフェミニスト研究、ジェンダー研究ではマイノリティだったと思いますけれども、いまは理論で出てきています。私は、強制的異性愛主義が批判の対象になるのは基本的に正しいとは思うけれども、一般的な運動では、このスタンスは浮くのではないかとも思うので、理論と運動の乖離ということが、個人的には危惧するところです。

田辺　ジェンダーの問題は、私も社会変容とものすごく関わっていると思うんですね。例えば現代の移住や移動において親族ネットワークが重要になる場面で、家族の意味がどんどん変わってきています。男性による土地所有を根幹とした家父長制の意味は相対化され、女性がネットワークをつなぐ主体となっているし、女性自身が、いま特に留保政策（reservation）との関係で、家族の社会経済的な戦略のなかでも重要な位置を占めるようになっています。これは非常に大きな社会変化ですし、インドの人びとのグローバルな展開を支えている根幹に、家族、親族そしてジェンダーの変化があるのではないかなということを考えています。

堀本　パンチャーヤットで議員の３分の１を女性にするということがありますね。国会議員でも法案はできていますよね。まだ通っていませんが。

粟屋　パンチャーヤットは、州によっては、女性議員をもう半分にしています。それが、どこまでエンパワーメントにつながっていくかという議論はありますが。

田辺　差別や排除のかたちが複雑化し、運動や主張も細分化すると、そこで下層民の連帯がどうできるのかという問題が出てきますね。

粟屋　問題は昔からあるわけですよね。例えばダリトは一枚岩ではない。アンベードカルも、マハールは支持するけれど、マングは対立するとかという、そういう問題でしょうか。

田辺　昔は、それでもカーストと階級というのが、やはり二つ大きなまとまりとして組織化されようとしました。いまは例えばセックスワーカーが主張するとか、フェミニズムのなかももものすごく分かれていくなかで、いろんな下層民の声がどうやって政治的な有効性をもっていくかについて、別の戦略が必要なのかもしれません。

粟屋　ダリトの全国組織などもあるわけですけど、いまは、あまり機能していませんね。インフォーマル・セクターの全国組織も、あまり機能していないという印象です。だから、さまざまな取り組みはあると思うんですけど、本当に、それがすぐ分裂するというのが、よく目にするところですよね。

田辺　そうすると、大きな政治組織として抵抗をしていくというよりは、州ベースで、さまざまな声が具体的な政治過程のなかで発言力を持つ場面があり得るということになるんでしょうか。

粟屋　ただそこでは、周縁に置かれた人が発言力をもつというわけでは必ずしもないですね。例えばNGOなんかを考えてみれば、オルタナティブな社会とかということを言って、大きな改革の方向性

を示すということがあるじゃないですか。でも、そういう議論をやっている人は多かれ少なかれ、ある程度エリートというか。決して周縁化された人じゃない人たちがメインになっていると思います。

長崎　インドの女性運動は、粟屋さんがおっしゃるようにいろいろ問題はあるけれども、日本から見れば着実に進んでいる。さまざまな活動が行われているし、多面的な問題指摘がなされているし、すぐれた研究書も書かれていると思うんですね。その点では、インドのジェンダー研究も、いろいろな角度から進んでいると思います。「そんなにインドを見なくても、アメリカやイギリスの女性運動を見ればいいじゃないか」という感じが、日本の人たちにはちょっとありますが、インドのジェンダーの動きは多様性も含んでいて、重要だと思います。

田辺　さて、現代的な変容についていろいろな話をしてきましたが、こうした大きな変化のキーワードの一つが「グローバル化」だと思うんですね。そのグローバル化のなかのインドをどう捉えたらいいのかについて、三尾さんからお願いできますか。

三尾　民博拠点は、文化人類学・民族学の研究が中心にあるということもあって、グローバル化ということに関しても、文化的な現象をどう考えるかが主題になりました。グローバリゼーションの複数性という議論があります。グローバリゼーションの単一の発信地があって、文化的、あるいは政治経済的にも一元化が進んでいくという図式ではなくて、グローバルな文化や価値の発信は、多元性を持って、いろいろなかたちで発信されていくという指摘です。そのなかで、インドからのグローバルな流れもあり得るのではないかというのが、われわれの見方で、それを「環流」という言い方で提示をしてきました。

要するに、それは、グローバル化が進むなかで、インド的な文化や価値が埋没してしまうのではなくて、世界に向かって発信していくようなパワーになっているということです。例えば、世界のさまざまなところに移民社会ができて、移民社会のアイデンティティそして文化や価値が、世界のさまざまな社会や文化と交渉を持ったり交流したりするなかで変質して、再びインドに戻ってきて、新しい文化なり社会の運動と連動していくという見通しです。そういう新しい視角を提示したことは、大きな意味があったのではないかなと私は思っています。

いろいろ議論を繰り返すなかで、そういう現象がさまざまなところで見えてきているし、あるいは歴史的な流れのなかでもそういったものが見えるということが、個別の事例の積み重ねとしてはっきりしてきたということは大きな成果だったかなと思っています。例えばインド音楽の場合には、世界的にどういうかたちでインド音楽がジャンル化され、移民の流れとともに、それが世界のさまざまな音楽文化と合流し、さらにインドのなかの音楽文化に影響を与えていっているかというようなことは、何人かの研究者が重ねて研究しており、実証的なかたちで論文も何本か書けるような、そういうところまで来ました。

ただ、ここから先は課題の話になるのだけど、長期的な変動あるいは文明論的なところまで考えたときに、インド的というのはいったい何なのかということ、そこはなかなかよく分からない。グ

ローバリゼーションの複数性という議論のなかでは、イスラームのグローバリゼーションの場合には、イスラームのかなりはっきりした思想的・哲学的なバックボーンがあって、そのグローバリゼーションということがあり得るわけですけど、その辺りの構造や構えは、インドの場合は明らかに違います。そのなかで、「インド的なるもの」とか「南アジア的なるもの」とか、そのグローバリゼーションとは何なのかというのは依然としてよく分からないところがある。

拠点として、もう一つやろうとしていたのは、グローバルな人の流れや価値の連動のなかで、南アジアの宗教的な運動がどういう動きを示しているのかについて、ヒンドゥー、イスラーム、キリスト教などのさまざまを相互に比較しながら考えたいということでした。しかしそこは、なかなかうまくいかなかったなというのが実感としてあります。なぜかというと、端的に言って研究者が非常に偏っている。ヒンドゥーの研究者はたくさんいるんですけど、インドのイスラームとか、キリスト教とか、仏教とかの研究者は非常に限られていて、いろいろ比較して考えるのは非常に難しいところがあったかなと思っています。この辺りはまだまだ、これからやるべきことがあるし、若手の研究者に期待するところも大きい。

もう一つあるのは、移民による人の流れが非常に活発になっているなかで、インド的・南アジア的な社会関係の在り方、社会結合の在り方が、どう変わっていくのかという問題です。人の流れが激しくなっていくなかでも保たれていく社会結合の特性は、いったい何なのかということには、もうちょっと深く突っ込んで考えたいと思っています。

長崎　インドのムスリムについてですけど、私の先生の荒先生はインドのムスリムの建築物をやっていらっしゃって、インドのムスリムについて、こんなに自由に研究ができるのは僕が最後だろうと、いつも言っていらしたんですね。グジャラートなんかには、インドのムスリムがたくさんいるわけですよね。しかし、やっぱり何となく手がつけられないというか。そういう意味で、インドのムスリム研究は非常に大事なんだけれども、これについてどうするかは、私たちの課題として残るということは頭に入れておいた方がいいと思います。

堀本　余談ですけど、グローバル化というときに、アメリカニズムにはそれなりの普遍性がありますね。イスラームの場合も普遍化しやすいわけです。それに対してヒンドゥー文明のグローバルな価値や広がりは弱いのかなという印象です。ただ、インドの場合には、在外インド人という存在に注目しておきたい。全部で約2100万人で、米国に約300万人、中東に600万人、アフリカに300万人ぐらいいる。この在外インド人は、文化、価値、民主主義などの発信で、グローバル化するインドの尖兵みたいなところがありますよね。

三尾　そこは、間違いなく、そういうことがあると思います。その一方でお聞きしたいのは、インドはデモクラシーと経済発展が両立しながら進んでいくという話があるなかで、それが普遍的なインド発のデモクラシーのモデルとして世界に広がっていくものなのかということです。アラブの春がうまくいかなかった、東南アジアやアフリカではデモクラシーと開発経済がうまく進んでいない

として、それはインドのようにやったらいいんだというかたちで、グローバルに発信できるシステムや価値となるのかというところですね。

堀本　インドの10億人の国が民主主義だというのが、それ自体がソフトパワーだと思うんですよ。ただし、インド的民主主義の発信性はどうかといったときに、やっているところは周辺国だけですよね。例えば、ネパールに行って、もっと民主化しろと言ったり。1990年代の初めの方ではミャンマーに行って、もっと民主化しろと、アウンサンスーチーと一緒にやっていましたよ。だから、インドの民主主義は地域的な限定版でしか発信性はないと。世界的な普遍性を持っているかと言えば、やや弱いですね。

田辺　ただ期待を込めて言うならば、開発のモデルと合わせた民主主義のありかたが普遍性をもつことはないでしょうか。つまり、民主的自由を保障しつつ、しかも人のパワーを発揮できるような社会経済環境を国がつくっていくなかで、経済発展をも成し遂げられるとすれば、それは、いまの中国モデルに代わる別のモデルとして、アフリカ諸国などに参考になるものとして注目されないかなと。逆に言えば、注目されるように、もう少しきちんとインドの発展モデルや民主化モデルを、研究者の方で明確化できないかなということは思いますね。

堀本　インドが2000年代の一時期に7–8%の成長率があったじゃないですか。あのときは、ほれみろ民主主義のもとでも経済発展するじゃないかと意気盛んでしたね。中国なんていうのは発展しているけど民主主義じゃないんだというので、インド人は元気だったんですよ。でも、現在成長率が4%台に落ちてきてしまったら、民主主義的経済発展モデルなどということは全然、誰も言いませんね。

田辺　成長率がせめて5–6%ぐらいに戻れば、またもう少し元気がでるかも（会場　笑）。でも現状では説得力をもたないということですね。

堀本　そうですね。

田辺　各拠点から、こういう点で成果があったということと、まだまだこれから明らかにしなければいけないことを挙げていただきました。こうした成果や総括を踏まえて、第2期のこれからの研究課題について、あらためてみんなで少し議論できればと思います。第2期の代表を務められる予定の藤田さんから口火を切っていただけますでしょうか。

藤田　私はとても口火を切れませんが、いくつか考えていること、自分が第2期でやりたいことをお話しさせていただきたいと思います。

一つは、冒頭に学際的とありました。いままで自然生態の分野がどうしても不十分で、これを何とかしたいという気もあるのですが、やはり非常に難しい。東南アジア研究が、なぜ、自然生態を含めた地域研究で一時期大いに注目されたのかというと、端的に言って、歴史が浅いからです。東南アジアは自然開発の歴史も浅いので、そこでは、いろいろな自然関係の話ができたのですが、南アジアでも、中国でも、日本でも、自然環境はそれほど変わらなくとも、そこにものすごくたくさんの歴史的過程が折り重なっているわけで、それを直接に自然環境と結びつけて論ずるのは非常に

難しい。すぐ暴論になってしまう。

じゃあ、これからも自然生態はやらないのかというと、少しやってみたいという気はあります。脇村先生が、インドのビハールの地に起こった、紀元前何世紀かのあの文明は、熱帯で初めて湿潤稲作をベースにした文明だったとおっしゃったんですね。確かにその通りで、中流域であれだけの文明ができた。私がこの2、3年、ビハールをあちこち回った印象から言いますと、バングラデシュよりも、ある意味で厳しい自然になりますね。というのは、洪水も激しいけれども、干ばつもあって、その両方が同じ年にあり、また同じ土地で同じ年に両方が起こったり、非常に難しい土地で、なぜ、あんなところで文明が起こったんだろうというのが素朴な疑問としてあります。

東アジアとの対比で言いますと、日本ではもともと山間部の方が比較的中心で、谷間とかに人が住んでいたわけです。それが、大河川の下流域に下りてきたのが中世末期から近世にかけてで、そこでの開発が一段落した時点で、いわゆる小農社会というものができたわけです。そこでイエやムラができて社会構造が大きく変わるんですね。それが日本の現代まで続く経済発展の起点だったといっても過言ではありません。そういう歴史を考えてみると、インドで、熱帯で初めて湿潤稲作の文明が起こったにもかかわらず、相対的には、その後、他の地域に比べて停滞したと僕は見ていますが、なぜそうなってしまったのか。東アジアや東南アジアとの対比で、社会構造や社会システムも含めて、その辺りをちょっと大風呂敷的に議論できたらなと思っています。そういうふうにしないと、自然環境の話は、なかなか取り込めません。

それから、インドは世界共通の経済発展段階から言いますと、食料問題の段階は1980年代で終わっており、1990年代に入ると農業調整問題という、農民の低所得が問題になる時代になっています。格差は拡大していくと考えられますが、それをどう乗り切っていくのかという大きな課題がある。

都市・農村問題は、各国、中国も含めて、いろいろなところで、いま問題になっているわけですが、僕は、インドの問題はASEANや中国とずいぶん違うなという印象を持っています。というのは、例えば、ベトナムで最近フィールドワークをしていますと、ぽっと外資系工場ができて、家庭の主婦や若い男子も含めてぱっと工場へ行って、すぐ近代的な服装をして、銀行口座も簡単に開くんですよね。ところがインドで工場というと、大勢はまだダーティーな感じです。これは、いったい何なんだということが常に問題意識としてあります。ASEANと東アジアでは輸出をベースにした経済発展があったんですが、インドは、同じ高度成長と言っても、ずいぶん中身が違います。これからインドの経済はどうなるかは、そういう比較の視点で見た方がいいのではないかと考えています。同じ農業調整問題といっても、ずいぶん違う。それは当然、「雇用なき成長」とよく言われるものと、結びついているわけですよね。いったい、今後どうなっていき、それに対して、人々が、どう対応していくのかという辺りが、私自身、非常に興味があるところです。

もう１点だけ言いますと、ジェームズ・スコットが最近「ゾミア」をテーマにした大著を書きました。中国の雲南省からミャンマーを通って、あるいはラオスの北部を通って、インドの北東部まで

広がる地域は、昔から、国家から逃避してきた人たちが住む地域であったということを書いておられます。これは非常に面白い論点で、いま国家から逃避する場所がなくなってきてしまっているので、ある臨界点を超えると、積極的に国家を利用しようとしてくるんだと僕は思います。その辺の動向が、ものすごく面白い。

最近、中国からは漢族がものすごい勢いで、そのゾミア地域に入ってきています。それに大きな危機感を持っているのがインド政府です。ミャンマーを民主化する前から支援したりしていたのもその関係です。インドも、もちろん北東部というゾミア地域を持っているし、今後、この境界域の動向に関して、中国研究者を含めて共同研究で何かやれないかと、いま考えているところです。

最後に、いままで、「現代インド」ではインドに集中してやってきたわけですけど、第2期では、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、スリランカ、ブータンも含めて、南アジアをやらないと。各拠点で、いままでよりもずっと意識的に周りの南アジアの国々をやっていく必要があると思います。その辺はちょっとお願いしたいと考えております。

三尾　南アジアに視点を広げる必要があるというのは、おっしゃる通りだと思います。そのための時間軸の取り方としては、バングラデシュや、パキスタンや、ネパールを議論の枠に入れるためにも、かなり長期の時間軸を考えないといけないというのは、もう間違いないことだと思っています。

あと、比較の視点も重要ですね。それは、もちろん潜在的にずっとあった、どこの拠点もやってこられたことだと思いますけど、インドの特性を理解するためには、どこかと比較しないわけにはいきません。そのためにも、中国とか、イスラームとの比較ということを、グループ全体として組み込めるような仕組みを考えた方がいいかもしれないと思いますね。

田辺　比較するときに、インドと中国といった地域単位だけでなくて、もう少し小さなレベルでも比較をしなければいけないかなとも思うんですね。中国にある工業地帯と、インドの工業地帯とか、あるいは、パンジャーブ地方におけるインドとパキスタン側とか、いろいろな単位での比較があり得ると思います。そこの工夫を少し意識的にできればいいかなと。

佐藤　いまの藤田先生のお話の、南アジア農村社会と東アジア農村社会の長期的な比較は興味深いですね。成果がとても楽しみです。

藤田　というか、自分も参加してください。（会場　笑）

佐藤　ひとつ面白いのが、とにかくインドは農業労働者の数が多いというウトサ・パトナイクによる指摘です。そういうすごく大きな特徴が、ほかの社会に比べたらある。農業労働者の人たちの性格付けをとても知りたいですね。

藤田　農業労働者をこんなにたくさん抱え込むような社会が、そもそもどうしてできたのかということが、あまりよく分かっていないですよね。そこを、生態という視点も入れて、何かもうちょっと新しい議論ができないかなと思っています。

田辺　農業労働者だけではなくて、いわゆる「サービス業」の人も多いですね。

佐藤　そうですね。ジャジマーニー制度のなかで、皮なめしとか、壺づくりとかをする、農村雑業層的な人たちが実は農業労働を提供するんですよね。そのなかで、特に土地改革後、土地所有権が成立していって、地主がそういう小作農などを追い立てていくみたいな部分もあったんですよね。そういうなかで現代的な労働者が本当に形成されていくのかなと思うんですけど。

藤田　脇村先生は別の論文で、大胆な仮説を出しておられます。どうして、村のなかで分業が発達した社会ができたのかというと、インドは、中国や日本と違って、モンスーンがあまりにも激しいから、農作業ができる時間は、すごく限られている。そういうなかで、全員を養うには、ああいうかたちの分業をせざるを得なかったと言うのですよ。

佐藤　確か、緑の革命のときに、農繁期のピークで労働需要が高くなったときに、労働の臨時化（casualization）が進んでいきます。だけど、ハリヤーナーとかでは、ある一時期ですけど、常用労働（attached labor）が大きくなるんですよね。それは農繁期のピーク労働需要を賄うために労働者を常雇にしていくということでした。

藤田　いやいや、脇村先生のはそれと逆の議論ですよ。つまり、ピーク時だけ農作業をやって、あとは農業は暇なわけです。だから、普段はいろいろなサービスをやっておけというわけですね。

田辺　僕も一般的な議論として、脇村先生の議論は、とても面白いと思います。ただインドってものすごく多様ですよね。生態も社会も。分業体制も非常に多様なので、どの程度それが環境の多様性と対応しているのかを、もう少し細かいレベルで実証的にやっていけると面白いなと思いますね。

藤田　なかなか実証は難しいんですけどね。

田辺　そうですね。他にいかがですか。

堀本　これから先、考えていくと、経済だと、東アジア地域包括的経済連携が2015年末までに作られる計画ですね。それが動き出すと、経済的はもちろん内政とか外交にも影響がある。インドも、周辺の地域との国際関係がもっと強くなるはずなので、その辺の、対外関係のなかでのインドをどう位置付けるかということが、ますます大事になるのではないだろうかという印象があります。

田辺　さまざまな話題が出ましたが、座談会での議論を通じて、おかげさまでこれからの課題と展望が明らかになってきたように思います。本日はどうもありがとうございました。

（座談会は平成26年9月22日、人間文化研究機構本部において実施）